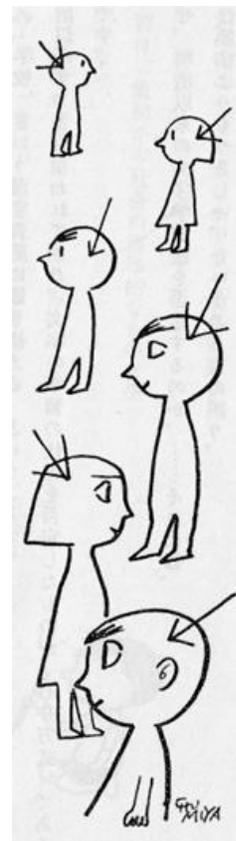


原理編



石井方式とは何か

石井方式とは何か。それは、ひと口に言いますと、「社会で一般に漢字を用いて表記している言葉は、常に漢字で表記して提出しなければならない。という基本原則に従って行なう漢字指導」ということになります。

たとえば、「学校」という言葉は、社会では、「学校」という漢字でこれを表記していますが、わが国の学校教育では、初めは「かな文字表記（つまり、戦前は「カクカウ」、戦後は「がっこう」という表記）で学習させています。

これはつまり、最初に「にせもの」である幼児向けの特別表記法を与え、それに習熟させた後に、「ほんもの」の「学校」という漢字表記に置き換える、ということなのです。

石井方式 漢字の教え方

この、明治以来ずっと行なわれてきた、文字の学習の仕方を否定したものが、石井方

式である、ということです。

では、なぜ、明治以来の文字学習法を否定するのか。……それには、

① かなは漢字よりもやさしい、という考え方の誤り。

② 漢字の読みと書きを同時に学習させるべきである、という考え方の誤り。

明治以来のこれらの考え方の誤りを改める、ということもその理由の一つではありますが、最も重要な点は、「表記の学習は、最初から社会の標準的なものを与えなければいけない。」という考え方にあります。私は、子供たちには、たとえむずかしくても、常に、社会の基準となるものを教えるべきである。」それが教育というものだ。と考えております。

言語や文字は、知識として「知っている」というだけでは不十分です。言語や文字というものは、その人の重要な一部分である、と言われておりますがそれほどに、その人の個性を表わすものになって、初めて生きてきた働きをするのです。



そこまでに至らないうちは、言葉は十分な働きをせず、自分の思想を思うように表現することができません。その意味で、言葉や文字は、「人間の道具」という表現よりも、「人間そのもの」であるという言い方が正しい、と私は思っております。

そういうものだからこそ、東北に育った人は、

東北に特有のアクセントを改めようとしても、なかなか改めることができないのでしょうか。

ともあれ、言語や文字は、知識 というよりも、習慣 にならなければ、その効用を十分に発揮することはできない、ということができましよう。

その「習慣」を作るために、初め「にせもの」を与え、それに慣れさせてから「ほんもの」を与える、という今の文字教育の仕方は、愚の骨頂と言わなければなりません。

一度身についた習慣を改めるには、その習慣を作った期間の二倍のの期間と二倍の努力とを要する、と言われていますが、とにかく、ほんちよつとしたことでも、一度身につけてしまった習慣を改めることの大変なこと、その苦痛なことは、どなたも経験してご存じのはずです。

一年以上にわたって「がっこう」という表記を読まされ、書かされて、それに慣れてしまっている子供たちに、「さあ、『学校』という漢字を教えてやりましたよ。これからは、これを使わなければいけませんよ。」と言ったところで、そう簡単に、学習したばかりの

新しい表記に移れるものではありません。

だから、テストすれば書ける漢字が、どうして、作文やノートに使われないのか。」と、多くの先生方が不思議がっています。これでは使うようになれないのが当たり前というものです。つまり、子供たちは「知識」として漢字を知っているだけで、「習慣」としては、かな表記のほうが身についているからです。

テストで書ける漢字を、ふだんなぜ使わないか

石井方式を始めて、二十年近くなりますが、「最初から漢字表記で学習した子供は、決してそれをかな書きすることがない。」という事実を確認しています。

この事実から見ますと、「現在の子供たちが、テストすれば書ける漢字を使わないでか



テストで書ける漢字が作文で使えないのは？

な書きするのは、漢字がむずかしいからかな書きするの
だろう。」という今までの見方は、誤っていることがよく
わかります。

これは、明らかに、「漢字書きの習慣がないために漢字
を使わない。」ということですよ。初めから、かな書きさせ
られて、「かな書きの習慣がついたために、その習慣から
抜け出すことができない。」ということですよ。

こんな簡単な事実が、今まで、だれからも指摘されず

にきたのです。

ところで、「漢字で書く」とする習慣をもった子供は、今それを書く力がない場合で

も、教えてもらって必ず漢字で書くとし、絶対にな書きしません。だから、今それを
書く力がなくても、必ず「書く力」を身につけます。

それに反して、「かなで書く習慣」をつけられている今の子供たちの多くは、今漢字を
書く学習をさせられ、漢字を書く力がついたとしても、作文やノートにそれを使いません
から、せっかく書く力がついたとしても、やがて「書く力」を失ってしまうでしょう。

ここに、大変な教育上の問題があります。今は書けなくても必ず書けるようになるのと、
今書いてもやがて書けなくなるのでは、大変な違いです。今の文字教育は後者であり、
石井方式は前者です。

漢字はかなよりもやさしい

「かなは漢字よりもやさしい。」……千年来のこの考え方は誤っていました。しかし、そう考え誤るのは無理もないと思います。漢字は、

- ① 字数が多いから、覚えるのに大変である。
- ② 字画が複雑であるから、覚えにくい。

という、むずかしく思われそうな要素をもって、そのため、平安朝以来、かなは女手(やさしい)、漢字は男手(むずかしい)と言われて、今に及んでいるのです。



ところが、漢字は「文字」であると同時に「語」でもあるのです。つまり、「山」「川」「花」「月」という漢字は、英語の「mountain, river, flower, moon」という「語」に当たっています。

英語の場合、これらの「語」を、千、二千と学習し、記憶しなければ、本を読んでこれを理解することができません。

とすれば、漢字の千、二千を覚えることは、とりわけてむずかしい、と考えるのが誤っていることとなります。

石井方式 漢字の教え方

漢字が「字」と呼ばれても、それは「かな」や「ローマ字」と同等に考えるべきものはなく、「字」の集合体である「語」であると考えますと、②の「字画が複雑だ」という非難も当たらなくなります。

たとえば、「整」という漢字などは、一見、たいそう複雑な字形をしていますが、これは英語の「to put (things) in order」に当たっています。「束」は things の意味、「文」は put の意味、「正」は order の意味に当たっています。一つ一つ照合してみますと、漢字のほうがかえって簡単であることがわかります。

「整」は、英語の三つの単語に当たるものを一つにまとめたので、これを一字として見る時は、知らない者にだけ複雑に見えるのであって、実は、みごとに圧縮された文字だ、ということがわかります。

とはいえ、論より証拠です。いかに、私が、「漢字はむずかしくない。」という理論をみごとに展開してみたところで、幼児がこれを覚えてくれなかったら、何にもなりません。

まだ文字というものを全く知らない幼児に、漢字とかなを、同じ条件で提示してみます。

すると、結果は、例外なく、幼児はかなよりも漢字のほうを先に覚えます。

その漢字は、ただし、幼児に理解できる言葉を表わした漢字に限りませんでした。たとえば、「範疇」などという漢字でも、ただ「はんちゆう」と読ませるようになるだけなら、できないことはありません。私は、自分の子供でこれを実験してみても、発音するだけなら

できることを確かめておりますが、こんな無意味な学習は一般にすべきことではありませんので、実験には幼児に理解できる言葉を表わした漢字と限ったわけです。

この実験は、すでに数千人の幼児に対して行なっていますが、その結果は、明瞭に、「幼児は、かなよりも漢字のほうが覚えやすい。」ということを証明しています。



幼児はかなより漢字のほうをはるかに早く覚える

それも、三歳ぐらいの幼児ですと、その差が比較にならぬほど大きくなります。漢字を覚えるのに費やした時間の、二十倍、三十倍の時間を費やしても、かなは覚えられません。両者にはそれだけの違いがあるのです。

それはなぜでしょうか。

それを考える前に、「記憶」ということはどのようにしてでき上がるものか、ということを考えてみたいと思います。

具体性のある漢字は覚えやすい

ある物事が記憶されるためには、まず、その物事について、「関心」がなければなりません。「心ここにあらざれば、見れども見えず、聞けども聞こえず。」と、昔から言われています。心がそこに向けられなければ、見ても見ないのと同じことで、これでは記憶されるはずがありません。

だから、対象に対する関心が強ければ強いほど、心に深く刻みつけられて、その記憶は強く確かなものになる、ということができます。

したがって、「幼児にとって、漢字とかなど、どちらが覚えやすいか。」ということの決め手は、「漢字とかなど、どちらが幼児の関心を呼びやすいか。」ということになります。

ところで、かなは、単なる音声を表わす文字であるのに対して、漢字は、実在する具体物を直接に表わす文字です。「鳩」「蟻」……こういう漢字は、従来、字形が複雑だということで、むずかしい漢字とされ、当用漢字表のわくの外に追いつけられてしまいました。

しかし、このような、幼児の興味の対象になりやすい「具体物」を直接に表現している



漢字は、容易に幼児の「関心」の対象になりますので、ほんとうは「覚えやすい漢字」なのです。事実、幼児は、一瞬のうちに、これらの漢字を覚えてしまいます。

これに反して、単なる音声しか表わしていない「かな」は、幼児の興味や関心の対象とはなりにくいので、結局「覚えにくい文字」ということになるのです。

三歳ぐらいの幼児の場合は、「鳩」だと関心の対象になりますが、「は」だと全く関心を引きません。零は何個集まっても零ですから、関心を全く引きつけない文字を、どんなに繰り返して教えてみたところで、覚えられない

のが当たり前です。これが、『鳩(漢字)』を覚えるのに費やした時間の何十倍もの時間を費やしても、『は(かな)』を覚えない「こと」の理由です、

「鳩(はと)」という言葉は、幼児にとっては、これ以上分解することのできない「最小単位」です。これを「は」と「と」の二音でできていると考えるのはおとなの考えで、幼児にはできないことです。

また、幼児にこのことを教えてみても、そういうことに何の意味も興味ももつことができないので理解させることができません。戦後の「かな文字教育」で、「はと」を一語としてまとめて学習させ、「は」と「と」に分解して学習させることを否定しているのは、そのためです。

石井方式 漢字の教え方

一年生でさえも、抽象能力が未発達だと考え、できる限り「具体的なもの」として、子

供の関心を引きつけるように工夫して学習させているのです。

「はと」「は」「は」とまとめて学習させ、「はな」「は」「はな」とまとめて学習させ、「は」と「の」「は」と、「はな」「の」「は」とが、同じ発音であって、同じ文字であることを、子供たちが自ら発見するまでは、これを分解して教えてはならない、とされています。

このように、一年生でも、かなの学習は、本来の『表音文字』としての用法を避けて、具体物に結びつけて学習させているのです。具体物を直接表わしている漢字が、かなよりも学習しやすく、覚えやすいことに気が付かなかったということは、思えば思慮が足りなかった、と言わざるをえません。

子供の記憶力はおとなよりまよっています

「それにしても、幼児に漢字を与えるのは早すぎるのではないか。」という意見がよく聞かれます。それで、そのことについても、しばらく考えてみたいと思います。

幼児は、肉体的に見ると、まことに弱々しく小さくて、頼りない存在です。また、精神的にも、未熟としか見えません。だから、私たちは、幼児のすべての能力を、ついそういう外見から、未熟で無能力なものだと判断しがちです。しかし、最近の脳生理学の明らかにしているところでは、『記憶』をつかさどる大脳皮質の神経細胞は、生まれた時にすでに完成した状態にある、とされています。

つまり、生後間もない赤ちゃんでも、記憶という点では、未熟どころか、おとなと全く異ならない状態にまで成熟している、というのです。だからこそ、生後わずか二、三年

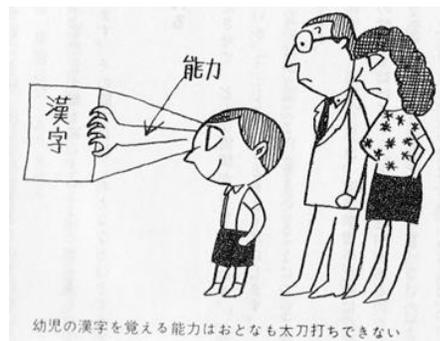
の間に、日常生活に事欠かないだけの言語能力を、身につけることができるのはありませんか。

外国に生まれ、外国に育った人は、大学の課程を済ませたほどの能力をもったおとなでも、日本に来往して、十年、二十年もいるというのに、日本語を話す能力という点では、

日本に生まれ、日本に育った三歳の子供にも及ばないではありませんか。

外国人だから、先天的に日本語の発音がよくできない、というわけではありません。外国人でも、日本に生まれ、日本に育った子供は、二、三歳くらいで、やはり、日本人の子供と同じように、りっぱな日本語を話すようになります。

この事実、少なくとも、言語能力においては、幼児の能



力はおとなの能力にまさっていて、決して劣ることのないことを証明している、と言えるでしょう。

「はと」より「鳩」のほうが実在の鳩に結びつきやすい

私たちは、「梅干し」という言葉を聞きますと、その言葉を耳にただけで、あたかもそれを目の前にし、あるいはさらにそれを口にしたかのように、口の中に酸いものがわき出るのを覚えます。これが、「言葉」というものの働きです。

だから、「言葉を習得する」ということは、自分の経験したものについて、それを思い起こすための「信号」を設ける、ということになります。たとえば、「鳩」という言葉を覚えるということは、実在する「鳩」、経験によって知りえた「鳩」そのものを、頭の中

に思い浮かべるための「は」と「と」という、音声信号と結びつけて、頭に記憶することです。鳩そのものと、「は」と「と」という音声を結びつける仕事は、決して、容易なものだということではありません。それは、鳩の絵を見て、自分の経験の中にある鳩を思い出す仕事に比べたら、ずっとむずかしいものです。

鳩そのものと、「は」と「と」という音声を結びつける仕事に比べたら、「鳩そのものと、『鳩』という漢字とを結びつける仕事は、ずっとやさしい。」ということができましよう。

なぜならば、「は」と「と」という、発声されるやすぐに消えてしまふ聴覚に訴える音声よりも、「鳩」という、鳩そのものと同じく視覚に訴える文字のほうが、記憶に留まりやすいのは当然だからです。

まして、その漢字が、「門」「や」「山」「川」のような象形文字であったなら、その字形がその実体と結びつきやすい形をしているので、記憶しやすいことは明らかです。事実、本書の初めに紹介いたしましたように、幼児たちは、ただほんの一瞬、関心をもって漢字に目を触れただけで、覚えようという意識も努力もなしに、その漢字が何を意味するか、それが何を思い浮かべる信号であるかを理解し、記憶してしまいます。この事実をもってすれば、三歳の幼児に漢字を学習させることは、決して早すぎるものではないことが、よくわかりいただけると思います。

漢字を覚える能力においては、三歳から五歳くらいまでの幼児が最も高いということが、多くの学者たちの実験でも、また私の実験でも、確かめられています。その能力には、おとななどはとても太刀打ちできません。

人間の能力の基礎は四、五歳頃までにつくられる

「幼児に漢字が覚えられるとしても、幼児に漢字を覚えさせて、どんな価値があるというのか。」「幼児には、もっと別な面に指導すべきものがあるのではないか。……:」ということをよく耳にします。

こんなことを言う人は、漢字学習の意義も価値も知らないばかりでなく、そういうことについて深く、真剣に考えてみようともしなかった人だろうと思います。

前にも触れましたし、後でも詳しく述べますが、〃石井方式・漢字学習〃は、漢字学習のために、他のいかなる領域の学習を奪うものではありません。〃他の学習を妨げるから〃という理由があるのならともかく幼児が何もそこなわれずに漢字を覚えるということとを、人々はなぜすなおに喜べないのでしょうか。まさか幼児におとなの特権を奪われる、

というので恐れているのではないでしょうね。

現代の多くの心理学者や脳生理学者は、「子供が、四、五歳までの間に、見たり聞いたり習ったりする事柄が、その子供の、その人間としての能力の基礎を決定する。」という事実を明らかにしています。

子供の知能は、四、五歳以降は、多かれ少なかれ、固定してしまうけれども、それまでの間に変化させうるこの可能性は、意外に大きい。」とされています。

その、子供の知能の発達を助ける最も効果的な方法は、〃幼児期に知的な刺激を与えること〃であって、具体的には、

- ① 早期に 〃言葉〃 の教育を施すこと。
- ② 早期に 〃文字〃 の教育を施すこと。

この二つであることが、明らかにされています。

言葉の教育は幼児期にこそ必要である

言葉の教育においては、その最も重要な部分は生後五カ年間に完成してしまうことが、世界のいずれの国においても、実験や観察により明らかにされていて、異論は全くありません。

フランスのポール・ショシャールは、植民地の多くの原住民の子供たちを観察調査した結果、「五歳以前にフランスに移住した原住民の子供は、完全なフランス語をあやつる能力を身につけ、フランス人と全く同等の、文化を享受する能力を獲得するようになるが、六歳以後にフランスに移住した場合、それも、六歳より遅くなればなるほど、フランス語の習得がうまくいけなくなり、フランスの文化的な生活に適應しにくくなっている。」ということを実実に基づいて報告しています。

それよりももっと明瞭な事例は、狼少女「カマラ」の示した事実でしょう。一九二〇年、インドのベンガル州で、シング牧師の手によって、狼の洞窟から救い出され、人間の社会に復帰した少女カマラの観察記録は、乳幼児期の教育の重要性を最もよく説いていると思えます。

カマラが救出された時の年齢は七、八歳だった、と推定されています。狼に育て始められたのは、生後半年くらいの時と推定され、したがって、それ以後の七年間を狼に育てられた、と推定されています。

救出後、シング牧師夫妻によって、愛情ある行き届いた養育を受けたのにもかかわらず、人語を初めて発声できるようになったのは、養育を受けて実に二か年という月日がたった後でした。

石井方式 漢字の教え方

その後、四年間に三十語、さらにその後の二年間に四十五語が、やっと使えるようにな

った、と報告されています。

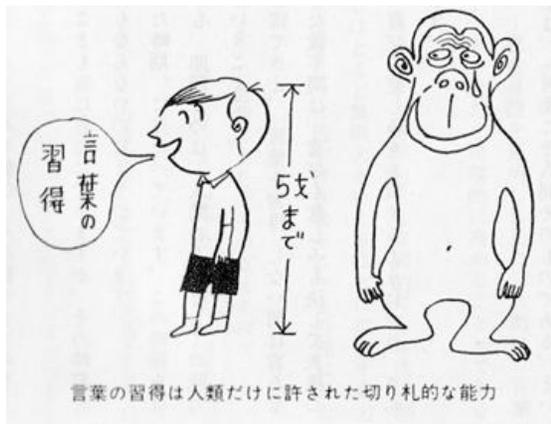
このような、言語における遅々たる発達は、乳幼児期に狼に育てられ、人語を聞くことが全くなかったためだ、と断定されており、決して彼女が精薄児ではなく、知能そのものは通常児であったことを、カマラの研究にたずさわった心理学者たちは断定しています。

鉄は熱いうちに打たなければならない

チンパンジーやオランウータンを、どんなに教育してみても、言葉を習得させることだけはできない、ということです。彼等は人類に次ぐ高等動物であり、言葉以外の物事では、かなりの学習能力のあることを示しています。しかし、言葉だけは習得できないのです。つまり、言葉の習得 は、人類の脳だけがもつ能力であり、人類は、この能力をも

つていたために、経験を次代に伝えることができ、知恵を蓄積することができて、他の動物に卓越した文化を享受することができるようになったわけです。

言葉の習得こそ、人類だけに許された切り札的な能力ではありますが、この力も五歳ころまでに学習しませんが、言葉を受け入れ、言葉を使いこなす能力を失ってしまうことが、先のカマラの例、ポール・シヨシャルの報告、その他今までの多くの調査研究で明らかにされました。



それは、ちょうど、赤熱した鉄は、伸ばすことも曲げることも実に容易にできますが、

その時期を過ぎてしまったら最後、どんなにたたいてみてもどうにもならないのによく

似ています。

幼児期は、言葉を習得するための、まさに「鉄の赤熱した時期」に当たっています。この時期をはずしますと、もう後では取り返しがつかないのです。しかも、問題なのは、人間の人間としての能力は、すべて、「言葉を習得」したところから育ち始める、ということとです。

複雑な思想はもちろんのこと、喜びや悲しみといった感情でさえ、「言葉を習得」しない間は育たないのです。カマラの観察記録によれば、人語を解しなかった数年間は、喜びも悲しみも決して表現しなかった、と伝えていきます。

六、七年たって、会話がかわせるようになって初めて、喜びや悲しみを表現するようになり、さらに、恥じらいさえ表現するようになったと報告されています。

文字は永遠の魂である

言葉は、人間にとって、最も大切なものの一つです。私は、「言葉こそ人間そのものである。」というように感じていきます。

それは、カマラが、言葉を理解した時に、初めて、喜びや悲しみや恥じらいの感情をもつようになったという事実が、これを何よりもよく表現していると思うのです。

ところで、人間は、言葉（音声言語）の上に、文字という視覚言語を発明しました。人間は、言葉によって人間になりましたが、人間は、この文字によって、その能力を飛躍的に高めることができるようになったのです。

言葉は、すぐに消えてしまい、しかも遠くには伝わらないという、時間的にも空間的にも極度に制限されていたものを、文字という、時間的にも空間的にもほとんど無限大とい

えるほどに拡大する力をもったものを作り出すことによって、人間の生命を、永遠なものに近づけさせることを可能にしたのです。

その本質からして、今まで不安定で揺れていた言葉も、文字の発明により、その支えを得て、ずっと安定したものになりました。今まで、絶えず揺れていて、とかくあいまいだった精神も、文字によってはっきりと示されるようになりました。

言葉は、文字によってその価値をいっそう高められた、というこの事実を、私たちは見落としてはなりません。

しかも、文字のおかげで、私たちは、釈迦やキリストや孔子に近づいて、親しく語り合えるようになったのです。

言葉と文字は一心同体である

ところが、「言葉は精神だが、文字はそれを入れる容器だ。」という人がいます、言葉は大切で、これを他から借りてくることはできないが、文字は捨てることも、他から借りてくることもできる、と言っているのです。

言葉と文字との関係を、このように切り離して考えることは、精神と肉体とを切り離して考える考え方よりも危険です、私は、精神あつての肉体、肉体あつての精神だ、と考えて、精神を軽視する肉体観、肉体を軽視する精神観を否定しますが、言葉と文字との関係は、精神と肉体以上に緊密な関係にあるものだと考えているものです。

初め、文字というものが発明された時には、聴覚に訴える言葉を視覚に訴えるものに換えた、というのにすぎませんでした。その意味では、容器という表現も認められましょう。

しかし、文字はいったん用いられ始めますと、**音声言語**である言葉に対する、**視覚言語**として、むしろ言葉以上に、人間の心を表わす働きを始めたのです。

それだけではありません。逆に、文字によって言葉を作り、精神を生み出すまでになったのです。「仁」「義」「礼」「智」などは、文字によって生み出された精神の一つです。

たとえば「仁」は、言葉として見る時は「人」です。人間の人間に対する愛、英語でいうヒューマニティー（ヒューマンは人間の意）を、「人と人」、つまり「仁（二人）」という文字でこれを表わすことにしたのです。そして、言葉としては、「人」と同じく「ジン」と発音しているのです。つまり、仁という精神は「仁」という文字によって初めて確乎たる精神になりえたのであって、それまでは、あいまいとして人に示す事はできなかったものです。

漢字から生れた言葉は漢字で書くほうがわかりよい

六年生の教科書をなにごとに見ていた時、ふと「こう水」という表記が目にとまりました。おやっと一瞬私はとまどいました。「こうすい」と読んだため、意味が通じなかったのですが、「こうずい」と読むべき言葉だったのです。

私はその時考えました。私たちは、「こう水」に当たる「洪水・硬水・香水・鉱水」を、漢字で学習したので「こう水」という表記でも、いく通りもの使い方があること、およびその違いもよく知っていて、文中に「こう水」とあれば、それがどの「こう水」を意味するかは、前後の関係で判断することができるのです。

しかし、漢字で学習しない今の子供たちは、「こう水」などという表記で、これらの言葉の違いを正しく理解できるものでしょうか。絶対にできないことだとは思いませんが、

漢字で学習するのに比べたら、困難であることだけは確かです。

「洪水・硬水・香水・鉱水」これらの言葉は、いずれも、漢字によって作られた言葉です。漢字から生まれた言葉なのです。だから、親を見れば子がわかるように、漢字を見ればその言葉の意味がすぐ理解できます。

わが国で使われている言葉の中で、重要な内容をもった言葉は、多く漢字で作られた言葉です。だから、これらの言葉を正しく理解するためには、どうしても漢字を理解する必要があるのです。